カウンセリングの視点から見た知的障害者の集団適応の過程に関する研究
—適応を支援する方法と人間関係に関する考察—

A study from the view-point of counselling about the process of adjustment to group activity by a person with intellectual disability

上　原　貴　夫
Uehara Takao

要　旨

知的障害者の集団適応について考察する。知的障害者がそれぞれに応じた形で集団適応していくことを示した。その場合、そのサポートの在り方が重要な意味をもっている。それは、人間関係の持ち方でもある。障害者を彼らの自主的な活動を尊重しながらサポートすることが大事であり、行動を阻害するような介入をしないようにしなければならない。人間関係においても彼らの主体的活動を尊重していくことが大切である。このことは、同時に活動するスタッフや、カウンセラーなどにもあてはまる。

key words：counselling　adjustment　intellectual disability　group activity

はじめに

現在、障害者の社会参加が進んでいる。また、社会でも積極的に受けとめていくことが求められている。しかし、これまでの状況からすると多くの場合彼らが社会と交わることは苦手である、あるいは非常な困難が伴うといった認識が多い。また、実際に彼らがどのようにして集団に参画していくか、そのプロセスを知るということはあまり行われていない。

そのため、ここでは知的障害者を中心として集団への適応についてそのプロセスの観点から考察する。同時に、カウンセリングの視点からみて、そのかかわり方について考察する。

1. 目　的

知的障害者が初めての集団へ適応するプロセスについて考察する。同時に、その過程を支援する方法についてカウンセリングの視点から検討する。考察を通して、対象となる知的障害者が集団に加わるうえで、対象者と近いもの（この場合は、母親とキャンプスタッフ）の果たす役割が大きいことを示す。

2. 方　法

知的障害者が集団活動へ参加する活動を行う。この集団場面への適応について参与観察する。記録はメモ、ビデオによる。およそ15分間隔のタイムサンプリング法（time sampling method）によって行なう。

3. 結　果

(1) 対象者　A君。男子18歳。高校卒業まで養護学校高等部で過ごす。現在、作業所で働く。知的障害とともに両下肢の障害を持つ。歩行は可能。日常生活は自分でできる。

この活動への参加の形態は、母親と一緒に参加する。

(2) 対象者の生活

対象者は作業所へ自宅から通勤している。作業所ではおよそ10人が働いている。彼に近い年齢の者は一番近い者で30歳である。そのため、ふだんは同年齢の仲間とのかかわりはほとんど無いか、希薄といった状況である。

(3) 集団の特性

1) 集団の構成

集団場面は、スポーツを主とした活動参加における参加過程として構成される。対象者以外に他の知的障害者を含め、小学生、学生スタッフなど、全員で50名が参加する。集団の構成は以下のとおり。（参照：表－1　参加者の構成）

①参加者数

参加者は一般募集をした。新聞や放送、各地の社会福祉協議会やボランティア機関によるホームページ掲載などの方法で広報をした。

参加者数（スタッフ以外）は31名である。男性と女性の比はおよそ半々である。子ども（小学生）より、成人が多い。

表－1　参加者の構成

（人）

年　齢		6	9	10	17	18	19	20	21	22	24	25	32	36	38	46	48	不　明		合　計
																		成　人	子ども	
性　別	男				2	1		1	1		1		1		1	1	1	5		15
	女	1	1	1	1	2	1			4		2		1				1	1	16
合　計		1	1	1	3	3	1	1	1	4	1	2	1	1	1	1	1	6	1	31

親子による参加が2組ある。1組は小学校1年の女子と母親であり、別の一組が対象者と母親である。

知的障害を持つ小学２年生、男子の参加が見込まれていたが当日はキャンセルした。

②スタッフの属性

スタッフは、大学や短期大学の学生である。学年と性別は「表－２　スタッフの構成」で示した。スタッフはこれまで不登校の小中学生や、自閉症、アスペルガー症候群などの児童生徒が参加する集団活動（キャンプ）の運営と参加者のケアを行ってきている。カウンセリングや集団活動の知識、技術を学ぶ研修を受けた上で、実践も得ている。全員、障害者を対象とした活動経験がある。

なかには在学中にこのような活動を続けて経験が３～４年になる者もいる。大学、短大の一年生である者も多いが、これまでに基礎的な知識を学習し、また実践としてこのような活動を集中して行っている。そのため、かかわった延べ時間数は非常に多く、これまでに多くの経験を蓄積してきている。

これまでに集団活動として、参加者が不登校、自閉症、アスペルガー症候群などの児童生徒(小中学生)、人数はおよそ55名が参加して、期間が１泊２日、6泊7日という活動を行ってきた経験がある。その準備期間も含めるとこれまでにかなり多くの経験を積んできているといえる。

これらの活動を通して、集団活動の運営について経験しているばかりでなく、参加者への働きかけとしてはカウンセリング的な働きかけについての知識と技術を身につけている。同時に、実際に実践してきている。

表－２　スタッフの構成　（人）

	１年	２年	３年	４年	計
男	2		1		3
女	11	3	1	1	16
計	13	3	2	1	19

2）活動の経過

①日程

活動の実施は、2005年９月である。日程は下記に示した。

10：00　受　付

10：30　開会式

アイスブレイク（レクリエーション：参加したものが互いに親しくなる。）

11：00　食事作り　味噌煮込みうどん・おにぎり

12：30　昼　食

13：30　プログラム参加

参加の形式は、自由参加。実施した種目は以下のとおり。

サッカー、縄跳び（大なわ跳びを含む）、バスケットボール

ソフトバレー、フリスビー、バレーボール、折り紙、スケッチ

集団ゲーム

16：00　閉会式
16：30　解　散

②参加の状況

各種の種目や食事作りも含め、参加方法は自由参加とした。参加者は、自分で参加種目やあるいは「かかり」の活動などを選んで、実施していく。また、いくつか複数の種目を行うこともできるとした。したがって、いくつかの種目にわたって行うものが多かった。多くの者が食事作りと競技の両方に参加した。

③スタッフの役割

スタッフの役割は大きく２つある。１つは、集団活動（キャンプ）の運営である。運営は、行事やプログラムの進行など直接運営にかかわる役割である。他の一つは、参加者のケアおよびサポートである。具体的には以下のようになる。

運営に関する役割では、準備係り（道具係）、受付、進行係り、開･閉会式係り、レクレーション係り、食事係りなどである。

参加者へのサポートでは、スタッフは、参加者が行う種目に加わって、参加者自身の活動をサポートする。このなかで、参加者に対する受容と働きかけが行われる。状況によるが活動への誘いや促しとともに、気持ちを受けとめていくことについて大きな配慮をした。一緒に話す、聴く、一緒に待つ、見守るなどに重点を置いた。

また、参加者による自由で、自主的な活動が実現できるように、日程や時間などで急がせるということはしないようにした。同時に、ねらいとして参加者相互の人間関係づくりが進むように設定した。特に、障害を持つ人についてこのことについて心がけた。そのため、スタッフは関係形成がみられるところではその関係になるべく介入しないようにした。具体的には、スタッフは人間関係づくりのきっかけとしての役割を果たすことをねらいとし、人間関係が形成され、集団活動ができるようになったところからはむしろ、遠ざかって見守るようにした。

(4) 対象者の行動

1) 時系列で見た行動

受付を経てから後の行動について時間の流れに基づいてみていく。およそ15分ごとに記録した。

(記号の説明)

・ｆ、ｍは成人の女性と男性を、ｇ、ｂは子どもの女子、男子をあらわす。
・アルファベット大文字はスタッフをあらわす。
・□で囲んだアルファベット大文字は参加者をあらわす。

10：00　（受付開始）

10：15　（自由行動）　集団としての行動は無し。

30　（計画では開会式）（集団行動）

40　開会式開始　主催者挨拶、参加者からの言葉など。

45　対象者は母親とは別に整列。開会にあたり、整列した前で参加者全員に向けて他の参加者と共に二人で挨拶をする。自分の気持ちを述べて、参加に対する積極的な姿勢を表明する。母親とは別行動。

・仲間づくりゲームでｆＧとｆ[J]とグループを作る。

・自己紹介ゲームで、ｆＨ、m[N]、ｆＭ、m[K]とグループを作る。自己紹介をして、うち解ける。

・ｆＰ、ｆＭと輪になる。(10:55)

11：00　（食事作り開始）

15　おにぎり作りをする。ほぼ全員が参加する。

・ｆ[B]、ｆＭと並んで食事作り。同じグループに、ｆ[G]、ｆＳ、ｆ[Y]、m[A]、ｆＹ、ｆＩ、ｆＸ、ｆ[S]、m[M]、がいる。

・母親は隣のグループ。ｆＡ、ｇＳ・ｇＴ、m[G]、ｂ[S]、ｆ[O]、m[W]と一緒に調理。

30～40

・ｆ[B]、ｆ[G]と話す。仕事は一段落。疲れが見えてくる。

・母親は別の場所で、別の仕事をしている。

45　・ｆ[B]、ｆ[G]、m[G]と座って話す。

・母親はｆ[S]とともにいて、対象者から遠いところで話している。

12：00　・ｆ[B]、ｆ[G]、m[G]と座って話す。

・母親はｆ[S]とともにいて、対象者から遠いところで話している。

05　・おにぎり作り。ｆＴ、ｆＰ、ｍＡ、m[G]、ｆＫ、ｆ[B]、ｆ[G]、m[K]と行う。

↓

↓　・母親は柿の皮むき。ｆＸ、ｆMO、ｍＡ、ｆ[S]と。

・m[G]、ｍＺ、m[K]と話す。ｍＡがおにぎりの手伝いを働きかけて、それに応じる。

15　・ｆ[B]、ｆＰと一緒に立ち話。

・母親はｆ[S]、ｍＵと漬け物作り。

20　・外の鍋へ移動。

30　（昼食）

・一人で歩いてる。お茶を飲みながら。母親は外にいる。

・ｆＴ、ｆＹ、ｍＵと話す。リンゴを切る。

（バレーボール始まる。ｂ[S]、ｆＫ、ｆＥ、ｆ[N]、ｆＩ、ｍＡ、m[SK]（＝途中参加）、ｆ[H]。）

45　・母親はｆKK、ｍA、ｆ[N]、ｆP、ｆ[S]と一緒。おにぎり作り。

・対象者はｆH、ｆ[B]、ｍU、ｆY、ｆT、とおにぎり作りを見てる。その後、体育館の外でうどんを手渡しして運んでいる列に入る。ｆ[B]→ｆA→本人（イスに座りながら。疲れたか。）→ｆH→ｆ[ON]。

・母親は体育館の中で食事配りをしている。ｆPから受けてテーブルへ。

13：00　・母親は体育館の中で食事配りをしている。

・対象者は体育館の外にいる。

10　（配膳が終わる）

15　・母親はｆ[S]と一緒に話している。

・対象者はｍ[W]とｆM、本人、ｆ[G]、ｆ[B]、ｆ[ON]で１つのテーブル。

・母はｆ[S]、ｆ[J]、ｆ[KY]、ｆMO、ｆK、ｆ[H]、と一緒のテーブル。

30　（計画ではプログラム開始）

食事続いている。

・対象者はｍ[W]とｆM、本人、ｆ[G]、ｆ[B]、ｆ[ON]で１つのテーブル。

・母はｆ[S]、ｆ[J]，ｆ[KY]、ｆMO、ｆK、ｆ[H]、と一緒のテーブル。

45　〃

50　〃

14：00　・食事終了　・スケッチ活動が始まる。

15　・本人、ｍ[SK]、ｆ[O]とスケッチに参加。ｍ[SK]が指導する。

他にｆ[ON]、小６歳のｇ[SH]、小９歳のｇ[KY]ｆ、ｆ[B]、ｍA、ｆTA。

30　・一人でフロアーに立っている。

・バドミントン、バスケットボール始まる。

45　・一人でイスに座っている。周囲を見渡している。

15：00

15　・ｆ[G]、ｂ[S]と一緒のテーブルに座る。しかし、会話は無し。

・母は、ｆ[S]と遠くの場所（体育館入り口）で話している。

30　・ｂ[S]、ｆ[G]、本人、ｍ[MN]と同じテーブル。疲れたのか、顔を伏せている。

35　外でゲームの準備始まる（マックス、アディら）

・ｆ[G]、本人、ｍ[MN]と同じテーブルに座っている。

↓　・母、ｆ[S]はゲームを見ている。

・ｆ[G]、本人、ｍ[G]、ｍ[MN]、ｍ[K]と一緒のテーブル。

↓　・母、ｆ[S]、小６歳のｇ[SH]、小９歳のｇ[KY]ｆ、mAとテーブルで紙粘土をしている。

・ｆ[G]、本人、ｍ[G]、ｍ[MN]、ｍ[K]と一緒のテーブル。

↓　・母、ｆ[S]、ｆX、小６歳ｇ[SH]、小９歳ｇ[KY]、ｆM、ｍAとテーブルで話している。

45　　↓　・母、f[S]、f X、小6歳g[SH]、小9歳g[KY]、f M、m Aとテーブルで話している。

・本人、m[K]とテーブルで座っている。会話はない。周辺を眺めている。

50　終了に向けた集合がゲームを用いた声かけで始まる。

・本人一人で立ち上がり、集合場所方向へ歩いていく。

・母親も別のテーブルから歩き始める。

＊初めて、母親方向へ向いていく。

＊集まった状態では母親が近くにいる。

＊母親、一声かける。本人しぐさだけの反応。

・母親の近くでゲームに参加する。

ヒモつなぎゲームで同じチームとなる。

競技は自分一人で行う。母親は順番を待っている。

閉会式では母親と前列で並ぶ。m[G]、本人、母親

16：00

15　終了

25　解散・片づけ

対象者がかかわった相手は参加者（スタッフ含む）49名中、35名である。人間関係の相手としては、スタッフが多い。全体をとおしてみた特徴として、①時間の経過と共に、集団へ入っていく姿が見られる。②しかし、行動を共にする相手としては大きな広がりは見られない。③疲れてくると一人で過ごす、休むなどの行動となり、身体的な状況が行動に影響していると考えられる。④手伝い的な行動をすることができる。手伝い的な行動は仲間関係を広げる要素となっていると考えられる。⑤一緒に来た母親と離れた行動ができた。これには、母親が自ら対象者との関係のあり方について、自分自身で当人が自分でやるようにと母親自ら自分自身に心がけていた行動が大きく作用していると考えられる。⑥対象者の集団参加についてスタッフの介入が効果をあらわしている。⑦比較的一緒にいることが多い相手もいる。午前中はスタッフのｆＰが多くかかわっていた。何かと世話をしながら、かかわっている。⑧全体的には人との関係は大幅に広がるということはないが、少ない範囲で関係を持ちながら過ごしている。⑨本人からの働きかけはほとんど見られない。⑩⑤と関連するが、母親が遠くで見守るという関係の取り方が本人の関係推進に効果的であった。これにより、母親以外の相手との関係形成が進んだと考えられる。

表－3　関係の対象の変遷

時間	活動	関係の対象者																																		
10:30	開会式																																			
45		fG	fJ・	fH	mN・	fM	mK・	fP																												
	輪になる					○		○																												
11:00																																				
15									fB・	fM	fG・	fS	fY・	mA・	fY	fI	fX	fS・	mM																	
11:30		○							○																											
45									○		○									mG・																
12:00									○		○									○																
15	お握り作						○	○	○		○									○	fT	mA	fK													
							○													○				mZ												
								○	○																											
12:30	話														○						○				mU											
	バレーボール															○						○	○			bS・	fE	fN・	mSK・	fH・						
45				○					○						○						○				○											
	給仕の列			○																											fA					
13:00																																				
13:15	食事								○	○	○																					mW・	fON・			
13:30	食事								○	○	○																					○	○			
45	食事								○	○	○																					○	○			
14:00																													○					fO・		
15																																				
14:30	一人でいる																																			
14:45	一人でいる																																			
15:00																																				
15:15									○																	○										
15:30											○															○									mMN	
15:35	話	○																																	○	
		○					○													○														○	
		○					○													○														○	
15:45	話						○																													
15:50	閉会式																			○																母親
16:00	終了																																			

※アルファベットに「・」は参加者をあらわす。

2）影響をおよぼす要因

①本人の心の要因

本人の気持ちをうかがい知る証言として母親が述べている言葉がある。母親によると、会場に着いたばかりの時点は、「帰りたい」、あるいは「（この場に）いたくない。」ということを述べていた。しかし、開会の挨拶の時には、これとは反対に「自分で楽しく過ごしていきたい。」という意味のことを話していたと、母親が述べている。

つまり、当初はあまり気乗りがしていなかった。しかし、参加者として挨拶をしたが、その折りには、一日の過ごし方について「楽しんで過ごしたい」という趣旨のことを積極的に述べていたといえる。

また、開会式の後に日程に入ると食事作りなどにも加わっていた。また、一緒に過ごすスタッフもあらわれ、行動を共にすることが多くなった。

このような経過から見ると、最初は不安であったかもしれないが、次第にうち解けながら共に過ごす相手を見出し、とけ込んでいったと考えられる。

②身体的要因

身体的には下肢に障害がある。歩行は自力でできるが若干困難である。そのため、急いで移動することを伴う行動はできない。体育館での活動に参加していた。また、スタッフと話したり、かかり活動が主となった。日程の進行とともに、疲労が出ていた。

③母親の要因

母親とは、離れた行動ができた。母親自身は自分自身について次のように述べている。

「最初（対象児が幼少の頃から）付き合っていた時は、いつでも一緒にいた。何かあったらすぐにやってあげていた。しかし、その後、彼がスポーツなどを通して仲間の中に出ていった時から、自分はあまり手も口も出さないでいる。」「なるべく、（母親である自分でなく、他人に）やってもらうようにしている。一人でやるようにしている。だから側に行かない。」

このようなことを述べている。対象者が自分でやることを見出し、そのような場を維持することを心がけた行動を示しているといえる。実際に、活動の中でも、母親は対象児がたとえ疲れた様子を見せた時でも、遠くから見ているだけであった。対象者は自分で切り抜けるか、スタッフや他の仲間と共に行動をしていた。

④スタッフの要因

スタッフは、対象者の行動を多くサポートしていた。これには二とおりの意味がある。1つは、対象者の行動を受容することである。もう一つは、行動（活動）を支えるということである。このことは受付の段階から行われた。受付でも、またその後の過ごし方でもまず参加者の気持ちや期待、希望、不安を受けとめることを行った。

また、活動が始まるとスタッフも種目に参加し、一緒の競技を行った。また、参加者の活動を認め、その行動に意味を見出していた。

このようなかかわりは、この場における対象者の心配や不安をやわらげたり、回避する

上でも、また、積極的な、主体的な行動を促す上でも大きな意味をもっていたといえる。

また、スタッフは参加者の関係づくりを大きなねらいとしていたため、関係が形成されて集団活動が生まれてきた場合には、遠くから見守るようにしたが、このような点も参加者相互の自由な人間関係づくりに役立ったと考えられる。しかし、このようなかかわりを切り替えるタイミングは慎重にする必要がある。場合によっては意図したとおりにはいかないこともある。

⑤その他の要因

会場は、体育館を用いた。天候は晴で、温度は25度であった。締め切った状態では蒸し暑い温度であったが、換気などに務めた。

安全に配慮しながらイスなどを置いて必要な時に休息がとれるようにした。

調理では包丁を使うこともあるので十分な注意を払った。

参加者自身の行動が安全で、快適にできるように配慮した。このような配慮は行動の自由を実現する上で大切である。

(5) 親の行動

このような活動の場合、親の存在は人間関係形成に対して大きな要因となると考えられるのでここで取り上げた。二組の親子の参加があった。

一組は対象者の親子である。母親は、対象者とは別の活動をする場合が多かった。観察者に母親は、この活動においてはあえて一緒の行動をしないことを述べていた。

母親自身の行動としては、やはり同じように自分の子ども（6歳、女児）と一緒に参加していた母親と過ごすことが多かった。

他の親子は小学生と母親で参加した。その母親も自分の子どもから離れて、活動していた。この母親は、普段子どもが家族以外と遊ぶことも少ないので大いに他人と遊んでほしいと言っていた。自分としても子どもに寄り添わないことを心がけていた。その間、子どもはスタッフと過ごすことが多かった。活発に活動していた。この子も当初はおとなしく見える状態であったが、慣れるにしたがい元気に動き回るようになった。

二組の親子とも、親のかかわりかが他大きな意味をもっているといえる。この場合、親の法で意識的に子どもから遠ざかることがよい効果をあらわしている。

4. 考　察

全体的な経過としては、なじめない段階、特定の相手を対象としている段階がある。今回では、この段階で留まっているといえる。しかし、大きな特徴は一緒に参加した母親との離れた行動である。

母親もあえて行動を共にすることをしないようにしていた。対象者から離れて、別の行動（活動）をする場面が多かった。このような場合でも、対象者は心配や不安を示すことなく活動していた。

この場合、スタッフのサポートが大きいと考えられる。一緒に寄り添うスタッフがいた。

スタッフを関係形成の仲立ちとして集団に入っていく過程が見られる。同時に、出来上がった人間関係にどこまでスタッフがかかわるかということも大事である。この活動では、見守る態度も取り入れたが、このことは参加者の関係形成や集団活動の実現にとって効果的であったと考えられる。

周囲からのサポートともに、環境づくりが重要な意味を持つ。対象者と母親の場合では、あえて一緒にいないという環境が対象者の人間関係形成に効果的な意味をもっている。また、活動自体では自由な時間がたっぷりと用意されている環境、スタッフが必要に応じて随時サポートできる環境が効果をあらわしていた。

このような活動をとおして母親など家族の成長がみられる。子どもの活動を尊重し、自主的に行うことを見守る姿が見られた。子ども達からすれば自分で考えて、自からの力でやってみるという経験が得られた。

5. 総括と展望

知的障害者の集団への適応過程を効果的に実現するうえで、対象者にかかわる者の人間関係のあり方が重要であり、また、活動場面の環境形成が重要である。人間関係では、彼らの主体的な活動を生かすことのできる関係のあり方が大切である。活動場面としても、時間的な余裕を確保する、参加者の声や反応、要求をとり入れた運営をするなど、彼らが自発的・主体的に活動できるように形成することが必要である。

これらのことを大きくとらえるならば障害者の社会進出が求められる現代において、それが効果的に実現されるうえで、社会のあり方が大きな意味を持つということができる。